

津守 真著

『保育の一日と
その周辺』

（フレールベル館
'89・5）

友定 啓子

これまでの氏の著作の中心になってきたものは、氏によって開示される幼い子どもの内面の世界の豊かさ、深さであった。私たちは、そこで示される世界に魅せられながらも、どのようにしたら、そのような理解が可能になるのかということも考えさせられてきた。

今回のこの書物の中でそのことがまとまりを持って示されている。氏は、「子ども学のはじまり」から、「保育の体験と思索」「自我のめばえ」「子どもの世界をどうみるか」そして今回の「保育の一日とその周辺」にいたるまで、一貫して、子どもの世界を表わしながらも、同時にそれをささえる保育者としてあるいは研究者としての自分を語り続けていたのだが、どこか「哲学」に近い印象があった。しかし、氏は今回はじめて、それは哲学ではなく「保育学」であることを表明している。

「哲学」に思われたのは、特に個人的な思想やものの考え方に見えるというより、おそらくそのすぐれて個人的なところに原因があったのだろう。また人間学的な深さもその要因であったろう。「保育」という子どもと大

人のかかわりの中に、人間の根源的な姿を見いだすからであろう。それは私たちが「保育」や「教育」というとどうしても何か決まったよいやり方があるかのような、方法的なイメージを抱いてしまっていることも深く関係があるだろう。その近視眼的期待にこたえないからでもある。

氏は、最近「保育的關係」という言葉を使っている。

この書物にも出てくるが、子どもが存在感を感じ、あるがままに受け入れられたと感じる快い雰囲気を創ることによって、その中で子どもは自らの内的世界を演出することができると子どもとの関係のことである。大人の側から言えば、子どもがあるがままに受け入れることが要請される。しかし大人は、意味のとれないことは認めようとしない傾向があるので、意識して、子どもの行為の意味を理解する努力をしなければならない事態に至っている。生活の中で、あたりまえに子どもに寄り添い、その喜びや悩みを共有することは、そう難しくはないはずだが、「科学的孩子も観」の潤歩する現代ではなみた

いていのではない。

「出会うこと」「見ること」「交わること」「物質のイメージ」「省察すること」からなる第一章「保育の一日」は子どもと関わるとはどういうことかが示される。子どもと生活を共にしている読者は、日頃なにげなく自分がつけている行動に深い意味があることに気づくに違いない。また、他の章では氏の「周辺」が時空間的に限りなく広いことにも驚かれるだろう。

「保育の専門家とは、他者とかかわり他者を育てることを、実践においても思索においても、自らの人生の課題として負うことを選択した者のことである。」（間章「自我の力としての保育」より）

（山口大学）